

【その一】ヒナ鳥購入の顛末

ついに再興の時は来た。一九九五年夏、ひまな大学院生だった私は思った。再び文鳥を飼い、自家繁殖させて代を重ねなければいけない。

もともと我が家では一九八〇年頃から、自家繁殖で生まれたヒナを餌づけして、成長すると外部から嫁や婿を迎える形で、五代にわたる系譜を誇っていた。普通、人間が餌づけした文鳥（手のり）は人間のつもりでいるから、箱巢の中でじっと卵を温めたりしないとされる。鳥カゴの前の人間に、遊んでもらおうとして箱巢から出てきてしまい当然卵は孵らない。



1980年代旧王朝の放鳥風景

したがって手のりでの繁殖は難しく、これを五代に渡って成功させたのは、自慢できることだった（この頃はそう思っていた）。ところが、このブクという名のオスの手のりを始祖とした文鳥の王朝は、五代目のコボというオスをもって断絶してしまい、すでに二年以上が過ぎていた。そして気が付けば、伝統ある我が家の文鳥も、「コボの未亡鳥」一羽を残すのみとなっ

ている。しかもこの未亡鳥は手のりではなかったから、私は手のりに飢えていた。小さい頃から手のり文鳥を部屋に放して遊んできたので、この空白は寂しい。さらに唯一残ったこの未亡鳥も、すでに五歳を過ぎていた。このままでは我が家から文鳥がいなくなる。何となく取り返しがつかない気持ちだが、私を駆り立てていた。

一刻も早くペットショップでヒナを買い、それを手のりの初代とした文鳥王朝を構築しなければならぬ。私は固く決意した。しかし、それには問題があった。文鳥の繁殖シーズンは秋から春にかけてで、暑い内は普通巢作りをしない。当然卵を生むこともなく、ペットショップにヒナが並ぶこともない。この辺は見境のない人間とおおいに違っている。

私は小鳥でも文鳥にしか興味がない。インコのようなクチバシの曲がった、色の派手なのは嫌いだ。代替に他の小鳥で間に合わすわけにはいかない。結局ヒナが売り出される秋を、イライラと待つしかなかった。

ところが、この年の夏は十分に義務を果たしてくれた。異常な孟夏で、実に勤勉に暑く、我々に夏というものがどういったものかを、必要以上に思い知らせてくれた。電器店からはエアコンが消え、東京電力は消費電力の増加に冷や汗をかかされた。しかもこの夏の性格はしつこく、いつこつに涼しくならなかった。

私は九月となると、早くもヒナ用の餌などを買い込み、『フンゴ』というワラ製のおひつのような蓋付きの入れ物に市販の干草を敷き、ヒナの受け入れ体制を整えてヒナが出回るのを待っていた。しかし自然の摂理には逆らえない。それらはいじりながら残暑を呪う以外に仕方がない。

もちろん、その間に何件かのペットショップをのぞいてはみたが、「あらあ、こつ書いと鳥も卵を生まないのよねえ。このままだといつ(ヒナが入荷するか分からないわねえ。」

といった、店員だか店主だかのおばさんの返事を聞くだけだった。あるお店のおじさんはヒナの入荷は十月になると断言してみせた。じれったく思いながら、それまで我慢するしかない。

十月、学問の秋。本来ひまとはいえ学生だったので、週に一、二度は学校に行かなければならない。大学は九月の半ばには始まっていた。文鳥のヒナには餌づけが必要となり、二週間ほど、朝の七時三〇分頃から三時間半おきに五回程度、

口の中に餌を押し込まなければいけない（これは我が家の方法）。したがって、常識的にはヒナを買って育てる時間などない。しかしじらされて、ますます文鳥に固執してしまっていた私に、そんなことは通用するはずもなかった。十月になると『フンゴ』を持って、手当り次第にベットシヨップなどを巡回せずにはいられない。

ところが、なかなかヒナは出回らなかった。すべて勤勉な夏のせいだ。ようやくある小鳥屋さんの店頭に、『文鳥のヒナあります』という、うれしい文字を見つけた時は、すでに十月も中旬となっていた。

少しさびれ加減のN橋商店街にあったその小鳥屋さんは、いかにも動物好きのおばさんが、半ば趣味で開いているといった風情で、何ともありがちな様子だった。とにかくヒナを見せてもらおう。大きなフンゴの中で、非常に小さなヒナが二羽うごめいていた。卵から孵って二週間そこそこといったところか。一羽はほとんど羽毛も生えていないし、目も開いたばかりのようだ。白文鳥と桜文鳥のヒナだった。

文鳥には全身の羽毛が純白の白文鳥と、およそ頭と尾が黒、腹部が桜色、頬と下腹部が白、他の部分がメタリックな灰色といった素敵な配色を持ち、胸部の灰色部分に混じった白模様が、桜の花びらのように見えることから桜文鳥と呼ばれる種類がある。最近ではこの二種に加えて、『シナモン』というのも売られている。これは桜文鳥の配色を、セピア色化したような外観だ。シナモン、つまりニツキだから、ニツキ飴の色からきた名称だろうと思う。シナモンからニツキ飴を連想する事に、ネーミングした者の年齢を感じないでもないが、ともあれ、これらの種類は単に毛色の違いによる区別に過ぎず、人間の肌の色と同じでみな文鳥であることに変わりはない。

「今朝入荷したばかりで、まだ餌もあげてないのよ。」
午前十時過ぎだった。昨夜親鳥から引き離したものとすると、相当空腹しているはずで、確かに喉元の餌を貯めておく部分（そのう）には、何も入っていない。おばさんはせわしく餌の用意を始めていた。

普通こんな小さなヒナは売り出されないものだが、これも勤勉な夏の結果だろう。しかし、餌づけについて準備万端、自信過剰きみの私としては、むしろ幼くて手垢のついていないほうが良かった。しかも、桜と白文鳥のヒナを一羽ずつ買

って、それがオスとメスに育ったら（ヒナの時には性別は不明）夫婦にしてしまおうと当初から算段していたので、これはまさに天の配剤、迷う余地などどこにもなかった。

「二羽ともください。」

おばさんはピストン式の給餌器で、手際よく餌をヒナの口に放り込みながら、入れ物はどうするかと訊いてきた。私はナップザックから例の『フンゴ』をこそごと取り出す。

「あらっ。」

年季の入った『フンゴ』をもった妙な客に対して、さまざまな備品を売りつける不可能を悟ったのだらう。おばさんは若干腹を満たしたヒナをひっくり返しておしりを見せた。ヒナが下痢だとおしりは汚れるから、玄人はおしりを見て健康を確認したりするのだらう。別に下痢でも良かった基本的に素人のせつかちな私は、適当に相槌をうつして、

「いくらですか。」

とせかすようにして、二羽で千数百円を払い、『フンゴ』を抱えて家路を急いだ。

【その二】ハイとゲン

つれ帰った二羽のヒナを、満足気に眺めていると、白文鳥のヒナよりも一回り大きい、数百円安い桜のヒナが（白文鳥のほうが人気だからだろうか）、「おまえは何だ」といった様子で、こつちをまじまじと見つめかえしてきた。きつとこいつが養い親かと確認しているに違いない。

白文鳥のヒナ毛は背中の一部が灰色である以外は白で、クチバシはピンク色をしている。それに対して桜文鳥のヒナは全身灰色、それも成鳥のメタリックな灰色ではなく、くすんだ黒っぽい色で、しかもクチバシは黒い。いかにも醜いアヒルの子といった容姿をしている。私はこの綿ゴミのような桜文鳥のヒナのほうが好きだ。

桜文鳥はハイ、白はゲンと名付けた。白といえば源氏の白旗を連想したのでケ

ン、源氏ときたら平家なのでハイとしたのだ。私が日本史の勉強をしていたので思いついただけで、大した意味はない。大体、小鳥の名前は簡単なほうがいい。なぜなら、たとえマルクス・エンゲルス・トンチンカンなどつけても、マルちゃんと呼称されるのは目に見えている。ましてヒナは性別不明なので、エリザベスだとか花子だとか権作だとかの名称もつけられない。

私はすでに買い込んでおいたヒナ用の餌を湯づけにし、その粒餌を、やはり用意しておいたプラスチック製のピストン状の給餌器で、毎日せっせとヒナの口の中に押し込み、幸福であった。

ところで、数種類市販されているヒナ用の餌は、どれも鶏卵の黄身をアワにまぶして乾燥させたもの(粟玉)を基本としているが、いろいろな付加価値がついている。あるものは葉緑素入りとしてあり、あるものは各種ビタミンを含んでいるという透明の粒『マイクロカプセル』なるものを混ぜてある。

私が与えていたものには、薄茶色の顆粒の入った小さな容器が添付されていて、粟玉を湯に浸した後にこれを一かけすることになっていた。何でもその顆粒には、白子エキスが入っており、その成分？DNA(袋にはそう書かれているが、DNAだと思う)は頭を良くするとされているものだ。鳥が餌に混じった薬物で利口になって、人類にとってかわるといふ手塚治虫のマンガがあったが、当然この顆粒にそこまでの効用を期待したわけではない。ただ『マイクロカプセル』より安く、何かその無意味さも感動的だったので使用することにした。もちろん物事に懐疑的傾向のある私は、宣伝文句通りの栄養がそれに添加されているとは限らないと思っているので、カキ殻を砕いた市販のボレー粉や、小松菜をすり鉢で、さらにすり込んで餌に混ぜることを怠りはしなかった。

『フンゴ』の底に敷く切りワラも、しょっちゅう取り替えられ、まったく至れり尽くせり、我が家の歴史上ではこれ以上ない環境のもとで二羽は成長していった。その間やむを得ず大学に行くときは、餌づけをご近所に頼むことでのしついで。すでに、近所のおばさんには、まっとうな人間なら確実にかわいいと思うであろう、丸い目で大口開けて、シイシイ、ピーピー餌をせがむヒナの姿を見せつけていたので、積極的に協力してくれたのだった。おかげでいざとなれば、『フンゴ』『ゴ』と学校に持って行って、教授その他に、動物愛護の精神を思い知らせてやるという私のたくらみは未遂に終わった。



ヒナ換羽以前のヘイスケ（右）とゲン（左）

さて十人十色、人間の性格もさまざまなように、動物にはそれぞれ個性がある。ある人はアリにすら個性があるという。アリについては分からないが、私の観察では金魚にも性格の違いがはっきりわかった。もちろん文鳥も一羽一羽違う。購入当初からヘイは少食で、人の顔をジイーと見つめているような様子だったが、やがて、好奇心旺盛でそこから中を飛び

回って遊ぶ活発な鳥に成長した。一方のゲンは大食だったが成長は遅く、成長してもものんびりで、人の手の中で眠る甘えん坊だった。

文鳥はあつという間に成長し、生後一ヶ月もすると自分で粒餌を食べるようになるが、外見から性別を見分けるのはほとんど不可能に近い。いろいろの微細な外見上の見分け方はあるが、非常に不確実だ。結局、求愛の歌であるさえずりをするのがオスで、さえずらないのがメスとする以外にない。ところが、オスがさえずり出すのは、生後三、四ヶ月たってから。だからこの不明の時期には、かっくに性別を推測して楽しむことになる。我が家の人間は、一回り小さなゲンに餌を与えるようなそぶりを見せるヘイを、メスに違いないと思っていた。人間の女の子がママゴトをしているような態度に見えたのだ。一方性格の反対なゲンはオスと決めてしまった。小さい頃、女の子の方が活発で、男の子の方がおとなしいというのにはありそうな話ではないか。

オスとメスなら、購入当初の目論見が、見事に図に当たる事になる。まんまと

うまくいったと喜んでいたら、二羽はグズグズとぐぜり始めた。若鳥は初めからきれいな音を出せないで、いろいろと喉を鳴らしてぐぜりながら、自分流のさえずりを編み出すのだ。間違はなく二羽ともオス。計画倒れにはショックをうけたが、私は二羽の悩める青少年にさえずりの模範を示してやることにした。

「ピー、ピュオン・ピュオン・ピュオン。」

ピー、ピュオン・ピュオン・ピュオン。」

口笛でやる。ちょうどホトトギスの「ホー、ホケキョ」に似た調子だ。これは断絶した先の文鳥王朝の始祖ブク（外見が丸かったからだが、何と安直な名前だらう！）のさえずりを、当時小学生だった私が一所懸命まねしたものだ。余談だが、このさえずりを聞いた巨人ファンの隣家のおじさんは、

「ジャイアンツ、ジャイアンツ、と鳴く鳥がいる。」

と言っていたく喜んでいたものだった。

さて二羽を手に乗せ、繰り返し、繰り返し口笛を吹く。

「なんと素敵なさえずりだらう！」

痛く感動したらしい二羽は、小首を傾げながら微動だにせず聞き入り、一所懸命まねし始めた。それぞれ練習しては、手本の口笛に耳を傾げにやって来て、また練習。鳥カゴの中でも、一日中、口笛の調子に近づこうと努力している。その様子は実にいじらしい。

数週間の努力の結果、ヘイとゲンには自分のさえずりを確立していった。ゲンのほうがオリジナル？の口笛に近い。一方のヘイスケ（オスとわかってからはスケ付きで呼ばれるようになった）は、明らかに無理をした『裏声』で、その音色はかすれ気味のハスキーなものになった。

【その三】嫁取りの一件

同性が同棲しても、くだらない洒落になるだけで、子孫は出来ない。私の目的が文鳥の代重ねにある以上、次には嫁を迎えなければならぬ。そこで一羽は夫に先立たれ、寂しくしている私の祖母のもとに送り、メスを一羽買って残る一羽と夫婦とすることにした。

ヘイとゲン、どちらを残し、どちらを養子に出すか。活発なヘイスケのほうが家族内の人気は高い。一方おとなしいゲンは年寄り向きかも知れない。また以前に祖母が飼っていた文鳥は白であった。こうした思慮に基づき、私は回りを紙で目隠しした小振りの鳥カゴの中にゲンを入れ、横浜から東京千駄木の祖母の家に向かった。およそ一時間半の電車の旅の間、目隠しのない天井部分から外の様子をうかがい、箱入り息子のゲンはそわそわし通しだったが、なんとか無事に祖母に手渡すことが出来た。

一九九六年、もうすぐ夏だった。いや実際はようやく五月の下旬であったが、私は嫁さがしを開始した。一年中発情している人間と違って、文鳥は涼しくならなければ卵を産まないから、本当はまだ暑くもならない前に、メスを買ってきても仕方がない。しかし善は急げ、思いついたら吉日というではないか。第一大事な息子の嫁だ。十分に下見してから決めるべきなのだ。私は電話帳『タウンペー』で調べて、またしてもペットショップの冷やかしを開始した。

器量も気立ても重要だが、それ以前にヘイスケは桜だから、嫁は白の方がいいと思った。なぜなら、飼育書によればこの組み合わせによって、白と桜両方が産み分けられるとされていたのだ。一粒で二度おいしい。昔、これを信じて桜のメスに白のオスを買ってきて夫婦したら、ゴマ塩頭の子供となったが、これはきつと何かの間違いに違いない。

文鳥は性格の激しい小鳥で、性格の不一致は途方もない喧嘩を引き起こす。一方が一方を追いかけ回し、夫婦生活どころではない。そこで、婿取り、嫁取りの際はお見合いさせるのが望ましいとされている。ペットショップに愛鳥を同道し、相手と一つのカゴにいれて相性を見るのだ。

「後は若い二人だけで。」
といったところだろうか。しかしこの見合いについて、私は否定的だ。手のりにした愛鳥は、初めてのペットショップという環境に、落ち着くはずもないから、キョトキョトしてしまって短時間で相性なんて分からない。それに、そもそもヘイはまだヒナ毛の抜け切らない小僧、いわば声変わりしたての中学生だから、見合いなどまさに十年早い。ペットショップの店員に何をいわれるか知れたものではないのだ。第一これは下見だ。

確かに下見のつもりだった。しかし京浜東北線S駅の、繁華な商店街の外れに

あるペットショップで、すばらしくきれいな白文鳥を見てしまったのがいけなかった。外見でオスカメスカ分からないから、お店のおばさんに訊くと、残念ながらオスだったのだが、この時点で、何となく早くメスを買いたくなってしまった。おばさんはメスを仕入れてくれるという。しかしこのお店は値段が割高で、しかも仕入れたメスが、この素晴らしいオスのような外見である保証は何もない。せっかくな仕入れてもらって、気に食わないと言いつ切る厚かましさを持ち合わせはないので、とりあえず断って他をあたることにした。

横浜線K駅、ここに来たのは初めてだったが、調べは十分に尽くしているのだから、駅近くの小鳥屋さんはすぐにわかった。割に大きなそのお店の中の大きな鳥カゴの中に、十羽以上の白文鳥が入っていた。カゴにはオス 円、メス 円と値札がついていた。文鳥の場合、産卵の際の事故（卵が産道「輸卵管」に詰まってしまう）の多いメスのほうがいくらか高いのだが、それにしても安い。一五〇〇円くらいだった。普通は四、五〇〇円するから、これは破格といえる。

これは絶対に買いた!

私の心は叫んでいたが、何の気もない様子で、お店のおばさんにどれがメスなのか聞いてみる。これこれがメスだという。私はあらかじめ目印（脚環をつけたりする）がつけられているのかと思っただが、どうも外見だけで判断しているらしい。尊敬と疑惑の念が同時に起こる。確かにメスだといわれた鳥はそれらしく見える。私は、目の回りやクチバシのつややかに赤いのがオス、ピンクがかつたのがメスだと見ますが、まったくあやふやで、外見で完璧に区別する事は不可能と信じていた。ところがこのおばさんは……。きっと店の奥に老夫婦がいるところからして、この人は老夫婦の娘で、小さい頃から小鳥を数知れず扱い、ものすごい識別能力を有するにいたっているのかも知れない。きっと結婚して近くに住みながら、両親の店を切り盛りしているのだろう。などとかってに想像しながら、とりあえずメスと指摘されたうち、最も容姿端麗の一羽を購入する。

いい買い物をした。小一時間かけて家に戻った私は、本来なら別々にして数日様子を見るべきところを、早速ヘイスケのカゴに『嫁』を放り込んで、様子を見ることがあった（感染症の危険もあるので、数日は様子を見るべき）。仲は良さそうだが、へいがからんでいっても相手にしない。容姿も良ければ、性格も良い。しかも割安。完璧だ。私は多めに満足し、小松菜、ポレー粉、粟玉を与えた。

翌日、朝日を浴びて『嫁』は気持ち良くさえずり出した。おそらく生まれてはじめて栄養満点の食事をとった『嫁』のクチバシは、つややかに赤くなっていた。オスだったのだ。啞然とする人間など無視して、彼はまるでアメリカのセミのような甲高い声で、実に気持ち良くさえずり続けた。

いかに完璧でもオスに用はない。私は小鳥屋さんに電話して、メスに取り替えてもらう事にした。うまい話には気をつけるべきだった。忸怩たる思いで『嫁』を連れてK駅に向かう。恐縮した小鳥屋のおばさんは、じつくりと観察した上でメスと思われる二羽の脚に目印をつけて待っていた。一羽は小振りにまとまった鳥だが、私にはオスの可能性があるように映った。もう一羽は大振りで、ほっぺたが奇妙に膨らんでいて器量は数段劣っていたが、いかにもメスといった感じだった(クチバシが小ぶりで色が薄いといった点)。おばさんも、こちらがより確実だという。どうもこのおばさんの鑑識眼は私とたいして変わらないようだ。

この際メスなら何でもいい。嫁は子供を産めばそれでいい。何やら大時代的な、どうせ成人すれば都会で悪さするに決まっている孫を望んで、跡継ぎ、跡継ぎと、目の色を変えている、おもに田舎に少数存在するらしい人のような考え方となった私は、もはや見栄えなどどうでも良くなっていた。私は、おばさんがお詫びとしてくれたポレー粉を片手に握りしめ、

「電車賃にもならないじゃんか。まったくまたオスだったらどうしてくれよう。」

などと不満と不安と不穏な思いを抱え



ヒナ毛の残るヘイスケと嫁入り直後のフク

ながら、そのお多福鳥を連れ帰った。

このお多福は凶太いというか、おおまかというか、ヘイスケにいじめられてもまったく意に閑せずといった感じで、その点たくましかったが、何しろ前の『嫁』が抜群に器量が良かったのと比較すると、ため息が出てしまう。それでも一カ月たってもさえずり出すことはなくメスであった。とにかく卵を産めばいい、私は自分を慰め、お多福顔の嫁を『フク』と名付けた。

【その四】ヘイスケの狂乱

まだ梅雨にすら入らないうちから、ヘイスケとフクには高たんばくで発情を促す粟玉や、健康に良い小松菜をたっぷり与え続けた。九月になると、すぐさま箱巣を鳥カゴに入れて、巣作りに使う巢草（ヤシの繊維）も用意し、卵産め、卵産め、とせき立てたが、ヘイスケにはその気がない。初めて見る箱巣にいぶかっていたが、やがてそこを自分の城と決めこみ、フクが近づくとすら許さない。明らかにフクを煙たがり、巣作りどころではないのだ。

十月になっても、十一月になっても状況は変わらない。外に出てきては、私の口笛によるさえずりに耳を傾け、人の食物をねだり（豆類や柑橘系が好物）、人の手の中で水浴びをし、ハチ鳥のように空中静止など高度な飛翔能力を駆使し遊び回っていた。普通、遊び回って捕まらなくなると、翼の羽（風切り羽）を数枚切って、飛翔能力を落とさなければならぬが、何しろ、口笛を吹くと飛んでくるヘイスケは、簡単にカゴに入るので、生まれてから一枚の羽も切られていなかった。手のりでないフクは、逃げ回られて怒った私にほとんどの羽を切られ、飛べない鳥化しているのとは対照的だった（当時の行動は飼い主としてかなり荒っぽい）。飛びながら直角に角度をかえられる彼の飛行は、まさに芸術であった。

飛行能力が優れていても、繁殖能力は怪しかった。奥手なら良いが、ひよつとしたら女性嫌い、変人、いや変鳥かも知れない。ヘイスケが不具であったら、私の代重ね計画は根本から崩れてしまう。当初嫁のフクがいわゆる『ウマズメ』だったら、たたき売ってやろうと良からぬ考えを抱いていたが、フクには問題はなさそうだった。彼女はしきりに箱巣に入りたがり、実際ヘイスケの留守中は入り



狂乱時、ドーナツをむさぼるヘイスケ

込んでもいたのだ。ところがヘイスケが追いついてしまっ。

これは駄目だと思
い始めた十一月の終
わりのある夜、またし
ても留守中に箱巢に
入り込んだフクをヘ
イスケが追いつくそ
うと争う？声が聞
こえていたが、しばら
くすると静かになっ
た。おやっと思ってい
たら、翌日からヘイス
ケの態度は豹変した。
彼は超ハイ状態と

なり、死に物狂いで巢作りを始めた。もう居ても立ってもいられないようにそわそわし、用意した巣草はすべて箱巢に運び、外に出してやれば、ちり紙でもお札でもレシートでも、輪ゴムでもシュガーパックでも何でもかんでも箱巢に持ち去ろうとする。人間の食べ物をむさぼり食べようとし、台所をデモ飛行して水浴びを要求するし、実に何とも滑稽で目まぐるしい。ようするに、前夜、彼は男になったのだから、これほど分かりやすい奴も珍しい。とにかく妙なものを箱巢に運ばれては危険なので、新聞紙をちぎってやると、これもバンバン運んで、もっとよこせと要求する。とつくに箱巢から新聞紙がはみだしているのだが、やめようとしな。

毎夜毎夜、外に出たヘイスケはこうした狂乱を繰り返したが、数日するとフクと交代で箱巢に入るようになった。相変わらず外に出て狂乱、狂奔はするが、三十分もすると箱巢に戻って、かわりにフクが羽を伸ばしに出てくる。交代で卵を温めているのだ。だいが常軌を逸しているが、なんて偉い奴だろうと人間たちは感動した。これほど熱心な父親もいないだろう。

努力のかいあって、十二月の中旬ヒナがかえった。箱巢からシイシイ餌をせがむ声が聞こえてくる。ヘイスケは一段と人間に食料をせがむようになり、特に焼魚を見ると、狂気の目の色で食いついた。そんなものをヒナに食わせてもらっては困るので、軽いビスケットなどを与えるようにしたが、その食べっぷりは鬼々せまったものだった。おそらくいろいろな変わったものをヒナに食べさせなければならぬと信じ込んでいるらしいヘイスケは、ビスケットに飽きたらまず、血走った感じの目で餌を探し回った。ヘイスケが帰ると、ヒナが餌をせがむ声が聞こえるから、きつとビスケットなどを吐き与えているのだろう。大丈夫なのだろうか（　　）
（　　） 当時は放鳥時間に夕食を食べる家族がいて、いろいろなものを盗み食いできる環境であった）。

文鳥は普通神経質なのでやめたほうがいいが、相手がさえずりの弟子であるヘイスケと鈍感なフクなので、私は箱巢の上ぶたを開けて、ヒナをのぞき見ることにした（こういったことが容易なので、繁殖にはつほより箱を使っている）。ヒナを抱きかかえるフクを割箸で強引に追っ払うと、イモ虫のようなものが三つごめいていた。他に卵が三つ残っている。六つ卵を産んで、三つかえった。孵化率五〇%、上等上等と思いつつ、二日後にまたのぞいたら（今度はヘイスケがヒナを抱えていたが、こちらを見ると、どつぞつと驚なさいとばかりに、遊びに行ってしまった）、イモ虫状のヒナは四つに増えていた。文鳥は一日一個ずつ卵を産んでいくから、すぐに卵を温めると孵化日もそろわず、ヒナの大きさもまちまちになってしまうので、数個生産してから温め始め、同じ日に孵化するようにするという。つまり、この二日遅れのヒナはその後に産まれた卵だったのだろう。

翌日またしてもぞき込んだ私は、孵らない卵を中止卵と見なして処分した。腐った中止卵が割れたりしたら、せつかくのヒナが死んでしまうかも知れないので用心したのだ。ところが割れた中止卵を良く見たら、グロテスクな話だが、二つともヒナの形になっていた。中止卵ではなかった。フクの出産間隔にはムラがあったようだ（　　）
（　　） 初の繁殖なので仕方がないことで、当時の私は認識不足）。かわいそうなことをしてしまったが、後悔しても遅かった。まあ、六羽成長されても困るし・・・。それにしても受精率一〇〇%とは異常なくらいに優秀な夫婦だ。

確かに出産と孵化させることにかけてこの夫婦は天才だったが、育児には問題があったようだ。十二月下旬、計算すると孵化後十五日ほど経ったので、手のり

にするため親から引き取ることにしたが、どうもヒナは小振りで、喉元にあつて餌を貯めておく袋（そのう）の中は緑色だ。どうも小松菜ばかり食べさせているらしい。そういえば、小松菜を入れてやると、ガツガツ食べてはいた。夜ヘイスケが与えるビスケットと、小松菜が主食では成長も遅れるだろう。感覚のずれた親からは一刻も早く引き離すべきだ。即座にヒナを『フンゴ』に移した。

せっかく努力して育てたヒナを取り上げられれば、さぞかし親鳥は悲しむだろうと思つてしまふが、そういった情は文鳥には多分ない。不思議なことだが、ヒナがいたことさえ忘れてしまふようだ。『フンゴ』に移したヒナを見せても、ヘイスケは怪訝な顔をして近づかない。ヒナに餌をやつていても無関心。フクも必死に子供の行方など探さず、まったく淡々としていて張り合いなどない。昔、手のり十姉妹（ヒナの時に耳かきなどで餌づけした）を飼っていた時、チビクロという名のオスなどは、ヒナでさえあれば、なさぬ仲でも異種族でも、シイシイと餌をせがまれば口移しで与え、実にかいがいしく世話をしたものだが、文鳥はそういったことをしない。自分の巢の中にいなければ関係ないらしい。

その後翌年の春までの間、この夫婦は六、六、七と十九個も卵を産み続けた。もちろんこれが全部ヒナになったら、私は露店でも開いて商売しないといけなくなるから、産むごとに人（鳥）口統制を実施し、卵を処分した。あまり日を置いて処分して、ヒナの形になっていると、また罪悪感に苦しめられるので、早めに処分したが、とりあえず受精卵かどうかは確認してみた。すると最後の七個のうち二つ以外には血管があり、受精卵だった。単純に考えれば十七羽だ。驚異の多産系だ。フクはよほど丈夫なのだろう。ヘイスケが春まで巢材集めに狂奔したことは、いうまでもない。

【その五】第二世代のそれぞれ

取り出した四羽は、ヘイスケの時と同様の行き届きすぎた餌を与えられた。また北国でもないのに、防寒用に電機アンカを底に置き、夜にはこれでもか、これでもかとはかり、十重二十重の毛布で包まれた『フンゴ』の中で、文字通りぬくぬくと成長した（当時はこれでも十分と考えていた）。残された写真の日付からそ

の経過を正確に記すと、一九九六年十二月二十五日のクリスマスに取り出されたヒナたちは、明けて一月六日には歩き回るようになり、九日には飛び跳ね、十二日には飛び回り始め、二十日には我が物顔に横行、群れ飛び遊ぶようになってくる。

名前は適当にトン・クロ・ゴマ・チビとつけた。トンは目の上の白い毛が眉毛のような模様となっていて、村山元首相（トンちゃんというあだ名だという）のようだったことに由来し、クロは一番黒いのと、感じがヘイスケに似ているからヘイスケのクローンという意味を込めて、ゴマは単純に頭がゴマ塩模様だからチビはより単純に二日遅れで産まれて一番小さかった、といったところがネーミングの理由だった。桜文鳥のヒナはみすばらしい灰色一色でクチバシが黒、白文鳥は背中以外が白く、クチバシはピンクでなければならぬが、四羽は皆その中間だった。クロは桜に近かったものの、それでもヒナ毛の時から頬は白かったし、クチバシにピンクの部分があった。あとの三羽は完全に合の子といった容姿だった。桜と白との組み合わせでは、ゴマ塩が産まれるのが真理のようだ（産み分ける血統と中間種を出す血統と白文鳥には二種類あると現在は考えている）。

三月ごろまで、四羽は遊ぶのが仕事と心得、傍若無人に行動した。ねらわれたのはヘイスケだった。何やらせわしく働き回っている変なおじさんは、ちび鳥四羽の興味の的となり、付け回されるようになった。

「ガーツ！」

ヘイスケの威嚇などはまったく通用しない。台所水浴びも、ヘイスケにとってくつろいだものではなくなった。ちびどもがまねをし、まして数にまかせて実父のヘイスケを押し退け、押すな、押すなの修羅場となったのだ。実子などという観念のないヘイスケとすれば、一体どこからわいてきたチビどもかと、まったく迷惑に思っていたことだろう。

四羽はそれぞれに個性的だった。トンは一匹狼タイプで、小さくてとろいチビをいじめたりもした。反対にクロは親分肌で、トンからチビをかばったりしている。また手の中で眠ったりして、最も人間うけが良く、いわゆる優等生タイプだ。

ゴマは変わり者で、暖かい電気ポットの上を自分の居場所と決め、回転式のミニ二鏡をくるくると回して遊ぶという芸当もあり、見ていて飽きなかった。チビはのんびりしており、動作も鈍く、何度も人間に踏まれかかり、一時は人間不信に陥



遊びまわるジュニア世代

り近づかなくなった。私がイスに座って足をぶらぶらとさせていると、わざわざ足下にやってきて、蹴飛ばされて悲鳴をあげるのだから、よほどの間拔けた。

四羽いるから、どれがオスでどれがメスかと楽しみにし、オスにはまたさえずりの講習をしようと思っていたが、一羽もぐぜり始めない。おかしいな、と思っていた五月

に事件が起こった。

鳥カゴの方から、「ギャ、ギャツ」という音。鳥の祖先が恐竜というのもうなずけるけたたましい声だ。私はぞっとした。きつと、ちびどもが大喧嘩したに違いない。昔、二羽の兄弟が妹を取り合って人知れず(日光浴中)死闘を演じた拳げ句、気づいた時には二羽とも重傷、一羽は死んでしまい、一羽は片脚になったことがあったのだ。三角関係になってしまふ構成に気づかず、三羽を同居させていたために起こった悲劇であった。

とんでいく。夜だ。暗くて良く見えないが、一羽底に落ちている。クロのようだ。えらいことになった。近づいて取り出そうとして、思わず手を引っ込めてしまった。蛇だ。とぐろを巻いた蛇がクロをくわえて、「こちらをくらんでいる。

「食事中じゃー」

奴はそういつているようだった。しかしその食物とはかわいいクロなのだから、失礼しましたと引き下がるわけにはいかない。

「くぐ、くぐー」

かなり狼狽しつつ蛇を引きずり出す。クロは自分の身に起こっていることを理解できないらしく、じっとしている。ギヤ、ギヤ、と悲鳴をあげたのは他のちびどもらしい。あつかましい蛇はクロを離さない。メートル以上あるそいつの尻尾を持って振り回してみる。離さない。どうしたものか、毒があったら困るし…。

「離さんなあ。」

とりあえず手近にいた私の父親に蛇を渡してみる。親父はクロをくわえたままの蛇の頭を、思うさま床に叩き付けた。

馬鹿野郎め。クロまで死んじゃうだろうが！

口に出す前に、クロは逃げ出していた。こうなれば何の憂いもない。親父から蛇をひったくると、嫌というほど床に叩き付け、ついでに包丁で斬首の刑に処した。哀れな蛇の末路ではあった。隣家のヒヨコでも狙えば良かったのだ（ここは大都市横浜の中央部なのだから不思議だ）。

蛇はアオダイショウかもしれないが、種類は分からなかった。メートル以上の大物は久しぶりに見たが、どうやって家の中に入り込んだものか。本来カゴの金格子の隙間から入れる大きさではなかったが、チビどもをのびのびさせてやるうと、二つの鳥カゴを連結させていたのがいけなかった。その連結部分から這い入ったようだ。

蛇には毒はなかったようで、クロはかまれた跡から、少し出血しただけで助かった。ところが数日後、今度はゴマが病気になるってしまった。クチバシが青ざめてきた。食あたりであろうか。隔離してヒヨコ電球という保温用の電球で温めたりしたが、あっけなく死んでしまった。原因は水浴びのし過ぎか、蛇にあったシヨックか、蛇の呪いか、あっけないものだ。

六月になっても残る三羽はさえずらず、みんなメスであることが確定した。そこで次なる代重ね計画推進のためには、三羽の内の一羽に婿を迎えなければならなくなつた。しかしその前に、一羽をまた千駄木の祖母のもとに養子に出す必要があった。実は祖母のもとに養子にいったゲン（年寄りが白いベツトと見ると必ず名付ける「チロちゃん」となっていた）が、ちょっとした隙に逃げ出してしまい、祖母は悲嘆にくれていたのだった。文鳥はインコ以上に、油断するとすぐ逃げ出すから注意が必要となる。

私は白文鳥よりも桜のほうが好きなので、桜に回帰させたい。メンデルの法則

でいくと、雑種であるコマ塩にコマ塩を掛け合わせると、桜と白とコマ塩ができるような気がするが、それは本来文系の私の関知するところではない。最も黒っぽいクロに桜の婿を迎えるのが確実だろう。そこでトンかチビを養子に出すことにする。クロとチビは仲良しだが、チビとトンは犬猿の仲。三者の関係を考えた上でトンを養子とすることにし、また私が運搬にあたった。

【その六】選ばれた婿殿

またしてもペットショップ巡りだ。これはもう趣味といわざるを得ない。今回のターゲットは桜文鳥のオス、色の濃いほうがいい。もうタウンページに載っている店で、未踏のものは数件に過ぎないので、まずは既知のお店をすべてあたってみることにする。

なかなか眼鏡になつたオスは見つからない。大体オスとメスを分けずに売っている不届きな店すらある。姿がいいのでオスカメスカ聞くと、ある店の二代目（昔から知っている店）など、分からないと答えてきた。

おまえ、そんな商売の仕方でもいいのか。プロだろ。ええっ！

といった嫌みは、ペットショップのしらみ潰しが済んだ後に、めぼしいのがいなかった時までとっておく事にする。確かに外見で性別を判定するのは不可能に近い。それならさえずるか否かを観察するぐらい、商売人は責任持つのが当然だろう。それが面倒なら商売替えすべきだ。

まだ六月だというのに、台風が関東地方に接近していた。風が強くなりつつある中、よせばいいのに私は京浜東北線T駅に降り立った。調べはついている。橋を渡った先の商店街に目的地がある。河口にかかった大きな橋の上は、台風の前触れの横風が吹き抜けており、雨が降るのも時間の問題の空模様で、さすがに帰ろうかと一瞬思ったが、やはり突き進む。

鳥屋だった。私はほとんど小鳥を中心に商っている店を小鳥屋さん、いろんな生物を売っているのがペットショップと分類している。しかしそこはその範ちゅうではなかった。薄暗い店内には、小鳥ばかりでなくニワトリや伝書鳩（レース鳩）が並んでいる。伝書鳩を陳列している店というのは非常に珍しい。しかもこ

の薄暗い雰囲気。東南アジアでワシントン条約を無視した商売をしている鳥屋をほうふつとさせる。ここは鳥屋以外の何ものでもない。店内に入った私は顔にこそ出さないが、ひどく感激してしまった。一九九七年、二十一世紀になるうとする今日、経済大国ニッポンの三百万都市に、このような素敵な店があるうとは。

こうした店の主人はアンちゃんやネーちゃんはおるか、おばさんであつてもいけない。ステテコに腹巻、くわえ煙草(『ハイライト』が望ましい)のオヤジでなければならぬ。・・・果たして、オヤジだった。さすがにステテコ腹巻姿ではなく、煙草も吸っていなかったが、さわやかさのない、いかにも鳥屋のオヤジといった風情で、一べつした私はすっかりうれしくなってしまった。もちろんそんな心中の思いをおくびにも出さず、私は無頓着に店内の文鳥の有無を確かめようとした。

実は店先の鳥カゴに見栄えの悪い文鳥が二羽ほど売られており、この店もたいしたのがいないと思いつつ、確認のつもりで店内に入ったのだ。壁際の鳥入れ(鳥カゴではない)を見ていくと、なぜか店の奥に、一羽だけ隔離された桜文鳥がいた。金格子越しにじつと品定めしていると、なれなれしく近寄って来る。体格が立派で毛並みも素晴らしい。アーモンド型の目が好きな私としては、そのまん丸の目は気に食わなかったが、いろいろ見てきた中で一番いい文鳥であることに間違いはなかった。これはオスだろうと思いつつ、とりあえず、この鳥の性別をオヤジに訊く。はたしてオスだという。再び無言でオヤジに背を向け、しばらくためつすがめつ見入る。

あと一軒未踏のペットショップがあるから、そこを確認してからのほうがいかも知れない。しかしこれ以上の文鳥はいないだろうな。またここに来るのも面倒くさいし・・・。

などと心の中で葛藤しながら、オヤジに正対し、この鳥が生まれて何年になるか訊く。文鳥の寿命は大体六、七年だ(現在は七、八年とするのが一般的)。私の勘(全体の雰囲気のほか、爪などの伸び具合とかでおおよそ判断している)では、二歳弱、まだ若いと見て取っていた。ところがオヤジは、まだ一年経っていないというではないか。一年未満でこれほど成長するものか疑わしい。しかしこの店では、六月末期のこの時期に、文鳥のヒナが売られていたりする。普通春までが繁殖シーズンで、こんな時期にヒナがいるのさえ不思議だが、入れ物にぎゅ

う詰めされたヒナは、ずいぶん丸まるとしていて大きい。秋から何度目かの卵から孵った春のヒナは、ただでさえ秋生まれより小さいとされているのだが、この店はどうも常識でははかれないものがあるようだ。買うことにする。

少し通ぶってやるうと思つて、家が遠いから鳩用の入れ物にしてくれるように頼む。普通に小鳥を買つと、手のひらサイズの小さなボール紙の箱に入れてくれるのだが、かなり窮屈なので、輸送に時間がかかったり炎暑の時には、二まわり大きい鳩用の箱に入れてもらう事があるのだ。オヤジは何やらうれしそうな様子になった。鳩用の箱にキャベツ（水の代わりとなる）と粒餌を放り込み、九州まででも大丈夫な支度を整え、

「文鳥のオスはいくらだったかな。」

とおよそ外見とは不釣合いな、愛想のいいような感じでつぶやきつつ、店先の鳥カゴに貼られた値札を見に行く。何か不思議でうさんくさい雰囲気なのだが、理由が分からない。静観し、会計して、箱を抱えてさっさと外に出る。

少しの間に、いつそ台風接近の気配が漂つ中を、大急ぎで家に帰る。折よく家には私の母親がいたので、なかなか素晴らしい文鳥を買ってきたと吹聴して、鳩用の箱から外に出す。少なからず息子の行動にあきれているであろう母親の心情など無視して、素晴らしい買い物自慢をしようと思つたのだ。そいつはバサバサと出てきた。大きい。いや、でかすぎる。薄暗い鳥屋の奥で、しかも一羽だけ隔離されていたから気づかなかつたが、我が家の文鳥より二回りは大きい。ちよつと、私の文鳥に対する概念を破るサイズだ。

何だこの大きさは！

自慢するつもりが、かえって薄気味悪くなってきた。一体こいつは何を食って成長したのだろう。

しかもこの婿殿はなれなれしかった。初めての環境に物怖じなんてしない。まして人の肩にのってさえすり出した。

「ホエ、ホエ、ホエ、ホッポポケケチーヨ！」

何なんだ、このジャンゲルの手長猿のようなさえすり方は！大体なんで肩にのっかっているのだ！

私の頭は混乱した。

「あら、手のりなのねえ。」



初日から我が物顔にさえずるブレイ

母親は言つ。確かに奴は手のりだったのだ。母親はむしる喜んだが、私は啞然としてしまった。お互い手のりの夫婦では、外で人間と遊ぶことばかり考えて、まじめに卵を温めたりしないことが多いとされているのだ（現在は手のりの方がむしる繁殖しやすいと考えている）。まさか手のりの成鳥が売っているとは。訊きもし

なかったが、あのオヤジは何もいわなかった。きつとこいつは手のり用ヒナの売れ残りで、そのままのオヤジが飼いでたものだろう。きつと閉店後には外に出して遊んでいたのだろう。だからこそ奥に一羽でいたんだ。手をかければかわいくもなるが、売れ残りは売れ残り、どうしたものか考えているところに、何やら文鳥の事に詳しそうな客が買ってくれたものだから、喜んでいたんじゃないだろうか。いい養子先だと。・・・仕方がない。

それにしても奴はあつかましかった。初日から、その巨体にものをいわせて小柄なヘイスケを追い払い、メスと見れば見境なくモーションをかける。ぴよんぴよん跳ねながら、

「ホエ、ホエ、ホエ、ホッポポケケチーヨー！」

を繰り返す。繰り返す。もうしつこいくらい間断なく繰り返す。ヘイスケが、作り声でさえするのに一所懸命で、ぴよんぴよん跳ねることを忘れてしまっているのに比べれば、まったく天衣無縫、野性のまんま好き勝手、といった感じだ。無礼者、少しは遠慮しろ。

奴の名前は『ブレイ』とした。

【その七】三代目の誕生

ブレイは、私から尻尾を引っ張られたり、息を猛烈に吹きかけられたり、捕まっ
ていびられたり、果ては輪ゴムの的にされたり（もちろん極ゆるく）の迫害を
受けたが、まったくこたえず、かえってかまってもらって喜ぶ始末だった。我が
家の名物台所手のひら水浴びもすぐにマスターするし、一日何十回も精力絶倫に
さえずり、ましてわざわざ人の耳元で大きくさえずった。お返しに口笛でさえず
ってやると、感極まったのか唇にかみついてくる。

奴は、人間の食事には何でも手を出すくせに、初め、小松菜をどうやって食べ
るのか分からず悩んでいた。さらによく見ると、目が赤い。

どういふ食生活、教育をしゃがったんだ、あのオヤジは！

私は多に不審の念を抱いた。こんな奴を婿にするのは、はなはだ不本意だが、
とりあえず、秋になるとクロと一緒に鳥カゴにして箱巢も入れた。そして、もし
クロが卵づまりで死んだら、赤目の無礼者はミンチにしてやろうと、半ば本気の
冗談として考えていた。

しかしブレイはメスには優しくかった。巢作りもした。ただし家庭に安住するタ
イプではなかった。クロは卵を産んだが、交代で温めるといふ発想がブレイには
なかった。クロは健気にも温めようとしたが、手のりなので外で遊びたいことに
変わりはない。我が家では毎晩一時間以上カゴを開けて、外であそばせる（人間
が遊んでもらっているとも言える）。この時、ヘイスケのようにある程度遊べば、
箱巢に戻って抱卵を交代するのが望ましいのだが、ブレイは遊びっぱなし。我慢
できずにクロも出てきてしまう。これでは卵が孵るはずがない。

しかもクロは体調を崩してしまった。どうも蛇にかまれて以来、病弱になって
しまったらしい。繁殖はあきらめて隔離して療養させる。何しろブレイの精力は
異常で、この夏に、前文鳥王朝の後家として、生き残っていたバアさん鳥が推定
年齢七歳で死んでいたので、その亡骸を取り出すと、近づいてきて交尾しようと
するほど見境がなかった。文鳥に人倫の道を説いても仕方ないが、まったくん
でもない奴で、病気のクロにも何するか知れたものではなかった。

クロには小鳥用の胃腸薬を与え、ヒヨコ電球で温める。冬の間何度もクロはこ
の飲水に混ぜる胃腸薬の世話になったが、近所のペットショップのおばさんの話

では、完全な医薬品は獣医からでないし買えなくなっているという。まったく役所はよけいな規制をする。小鳥を扱う獣医がどれだけいるだろう。ましてそこらの薬屋が、小鳥の胃腸薬を扱うだろうか。緊急の場合どうしてくれるのだ（一九九七年当時、まだ小鳥の医療は一般的ではなかった）。

生意気にもうすのろのチビは色気づき、ブレイがさえずりつつ言い寄ると、尻尾を振って交尾を促したりしているの、いつそ夫婦にしてみました。姉の旦那だったわけだが、人間ではないからいいだろう。卵は産んでも、どうせ育てないだろうから、箱巢も撤去しつば巢に替えた。クロに比べればチビは人間うけない鳥で、どちらかといえばやっかいもの。憎悪されているブレイと一緒に、何の期待も出来ない夫婦と投げやりを決めた。

そこで私は、またしてもヘイスケ・フク夫婦に期待する。やはり夫婦ともに手の上では繁殖は難しい。特にメスが手のりというのは不利なように思える。ぜひともフクにヘイスケの息子を産んでもらわねばならない。勝手にこのように判断したのだ。ところが問題があった。一年経って、夜一時間以上鳥カゴから外に出してもらえろというライフスタイルになれたフクは、手のりでもなくせに遊び回って卵を産もうとしない。

夜遊びに心奪われたのか、フクは水浴びもせず浮ついている。白いものだから汚らしい。十一月、卵も産まず汚いフクを苦々しく思っていた私は、フクを捕まえて、顔にはかからないよう石鹸をつけてお湯でこしこし洗ってやった。この強制洗浄で、まさに死ぬ思いをしたフクは心を入れ替えたらしく、いつまでも外で遊ばず、自主的に箱巢に戻るようになった。何が幸いするかわからない。そして十二月、昨年の異常な行動ほどではないが、相変わらずのヘイスケの献身的な協力によって卵が産まれた。

卵は五つあったが三つ孵った。普通だろう。のぞいてみると一羽だけ頭抜けて大きい。ほかの二羽がようやく目が開いた程度なのに、もう羽が生えてきている。孵化十二日目、もう少し下の二羽の成長を待たなかったが、大きいのはこれ以上放っておくと人を恐がりそうなので取り出す。どう見ても、三日か四日の成長差がある。

とにかく良かった。一羽でもオスならいいなと思っていたら、チビとブレイのツボ巢から「シイ・シイ」とか細かい音がする。まさか。このやっかいもの夫婦に

卵が産まれたのは知っていた。しかしまったく温めていなかった。一時はヘイスケたちの卵とすり替えて、人間によくあるみたいに祖父母に育てさせようかと思っただが、微妙に産卵時期がずれていたので断念していたのだ。夜一時間以上放っておかれた卵がどうして孵ったのだろうか。奇跡だ。やはりブレイの遺伝子には何かある。

孫が誕生すれば、ヘイスケたちの卵は無理して孵すこともなかったが、ヒナを捨てるわけにもいかない。第一、三羽のうち頭抜けて大きい奴はおもしろかった。餌づけを開始して十日もすると、ほかの二羽がはって歩くのがやっとなのに、ピヨピヨ大きな顔で歩き回り出していた。早熟、ませている。名前は『マセ』とした。他の二羽は灰色と白い部分が半々なので『ハン』、餌をがつつ食べるので『ガツ』とそれぞれ名付けた。

がつつ食べるといえば、この時は例のDNA入りから、『マイクロカプセル』の入った餌に主食を替えていた。この餌の粟玉は、いかにもたくさん黄身がまぶしてあるらしい色をしていて、高級そうで確かに割高だったから、ヘイスケたちの与える小松菜の多い餌よりおいしかったはずだ。ついでにいうと、防寒のために相変わらず電気アンカを底に敷いていたし、『フンゴ』は衣類のフードを改良したもので包まれていた。我が家的にはまったくこれ以上の過保護はない環境であった。

チビとブレイは、ヘイスケとフク以上に育児が下手だった。結局、五つあった卵は一つしか孵らなかったで、育児本能が刺激されにくかったのかもかもしれない。さらに、せつかくの一粒種も少ししか餌を与えられないらしく、非常に成長が遅かった。二週間ほど待って、ずいぶん小さかったが取り出した。奇跡、ミラクルな存在であるこのヒナの名は『ケル』とした。

そのケルをマセたちの『フンゴ』に入れてみる。いじめる様子はないが、何だろつかと少しつつく。また、マセは面白がって上に乗っかるものだから窒息しないとも限らない。ほんの二週間の違いだが、まるで大きさが違う。やはり別々にしなければいけようだ。私はつば巢を改良して一羽用のフゴ(この呼称のほうが一般的なので、年季もの以外は「ン」を取る)を作った。一羽なので防寒はさらに厳重を極めた。少し暑くしすぎて入ばってしまったくらいだ。

正月元旦は、千駄木の祖母の家に集まるのが、母方の親戚たちの習慣となって



カメラ目線のマセたちにつぶされそうなクル

いる。マセは放っておいても死にそうになかったが、ハンとガツは自分で食事できるか心許ない。ましてクルはまだ全然小さい。実は前年のクロたちもこの会合に『フング』と同伴していた。今年も連れていくことにする。出発しようとする、ガツが見当たらない。放つても置

けないので、私だけ残って探していると、二階にいた。もう飛ぶことも出来たのだが、実に世話がかかる。三羽を『フング』に押し込め出発する（クルは他の家族が持つて先行）。祖母の家では、動物愛護精神のかけらすらない非人間的な従兄弟たちの視線など問題にせず、せっせと餌を与える。もちろん自分もせっせと酒を飲む。

マセたち三羽の腕白に小さなフゴを占拠されたり、迫害というかわいがられ、三代目クルは見る見る大きくなっていった。一ヶ月もすると三羽と見劣りがしないくらい成長したので、一緒のカゴに入れてみる。いじめられるかと心配したが、案外あっさり溶け込んでしまった。見慣れているのでこだわりがないらしい。

これ以上ヒナが生まれても困る。かといって産んだそばから卵を取り上げると、昨年のフクのように、次から次に産んでしまう。私は偽卵（擬卵）を使うことにした。プラスチック製のそれと取り替えれば、二、三週間は無駄な努力を続けて温めるはずだ。あまりにフクが卵を産むので、すでに少し使用してみたが、市販のものは二つしか持っていなかった。擬卵などスーパーで売っているものではないので、この際紙粘土で作ってしまう。十数個も作って置いておくと、外に出てきた文鳥達が喜んでつつき転がしていた。クロやチビはお腹の下に卵を引き寄せると、ために、未使用のつば巢の中に数個入れておくと、

「あら、こんなところに卵が、大変。」

といった感じで温めだした。完全にだまされている。私はフクヤチビが卵を生むと、この自家製擬卵と交換したが、取り出した卵をよく見ると、実は大きさがばらばらなのに気づいた。一番大きくて形の良い卵は戻して、温めさせる。結局、これらの卵は孵らなかったが、卵の段階で個体の選別ができるような気がしてきた。何しろ、マセと他の二羽との成長速度は段違いだった。一九九八年四月となると、マセは完全にヒナ毛から成鳥の毛にはえかわっていたが、ハンとガツには多くのヒナ毛が残っていた。驚いたことに二週間遅れのクルは、この二羽の成長を追い越し生えかわり、桜文鳥になっていた。同じものを食べているのだから、この違いは先天的なものに違いない。さらに単純に考えれば、卵段階ですでに決定しているように思えた。マセやクルは大きな卵から生まれ、ハンやガツは小さな卵から生まれた。このように考えれば、簡単なようだ。

もっとも、学校の朝礼の時に一番前に並ぶ者が、必ずしも未熟児だったわけではないから、小さな卵から孵ったヒナも、たんに成長が遅くなるだけで、結果的にはあまり意味がないような気もする。

四羽のちびたちは、去年のクロたち同様に遊び回った。そして台所水浴びはさらに熾烈なものにならざるを得ない。ヘイスケ、クロ、チビ、ブレイ、マセ、ハン、ガツ、クル、八羽が押すな押すなと殺到する。

まずヘイスケが来る。手の中で水浴びを始めようとするとクロが近づくと、ヘイスケがこれを威嚇すると、ブレイが参戦してヘイスケを追い払う。しかしブレイが入ろうとすると、これを無視してクロとチビが先に入る。女性は強いと思っていると、四羽のちびが押し寄せ、阿鼻叫喚の場となる。マセが割り込む、それをハンが上から踏みつける。ガツとクルも頭を突っ込むが、体制を立て直したマセに片脚で蹴り払らわれる。追い出されたクロも、負けじとちびたちの上に乗かって割り込むようにするし、その間ブレイも体力にものをいわせて横から押し退けようとす。その間おっとりしたチビもすきをうかがい続けている。こうした繰り返し。イモ洗いよりもひどい。ヘイスケは人間肩の上で、近づくことも出来ずにいる。

「ああ、昔は俺一羽だったのに。」

ため息が聞こえるようだ。

【その八】逃亡癖の矯正法

人間も三人いれば派閥が出来るそうだが、文鳥も同じ。マセとガツ、クルとハンがそれぞれに仲が良く、それぞれの派閥の代表としてマセとガツは牽制しあっていた。マセは大きく脚も太いし、要領が良く、なおかつ回転鏡をくるくる回す唯一の存在だった。これは亡きゴマの得意技だったが、ゴマ塩頭とともに継承したことになる。

マセに向かって、一度ふざけて大きく口を開けてみせたら、前歯に乗り、口の中をのぞきこみ、奥に入り込もうとした。もう少しで飲み込むところだった。文鳥をのどに詰まらせて死んだら、絶対世界中の三面記事で笑われ続けただろう。実に油断ならない鳥だった。

一方の代表クルも油断がならない。一度、私のおしりの下敷きになったことがある。イスに腰掛けたら、何かもこもこと違和感があるので跳ね起きると、ぐったりとしていた。驚きあわてて揺り動かすと、ハッと目を開けて逃げ飛んだ。危ないところだった。

この間の抜けたところは母のチビに似ている。外見も細面の美鳥系でやはり母似だったが、フレイの影響か、チビより骨格がしっかりしているように思えた。しかしある日、ふと見ると指が一本もげそうで血が出ている。たぶん犯鳥はヘイスケだろう。昼間四羽は、鳥カゴのある小部屋に放し飼いにしていたが、この日はヘイスケも出ていた。威嚇で相手の指を狙うのはヘイスケの得意技だ。

薬をつけても自分でなめてしまう。自然に直るかと思っただが、数日後傷口が黒くなり、脚は熱を帯びて元気がなくなった。普通なら獣医さんに見せるべきだが、文鳥に医者是要らないという個人的な主義のため、自分で処置しなければならぬ。い（この時点では小鳥の獣医さんの存在を十分理解できていなかった）。とりあえず、化膿して毒が全身に回ってしまわないように、傷口の付け根を細い糸で縛った。この処置は効いて、クルは元気となったが、指が一本なくなってしまった。

幼いうちは、なるべく遊ばせるべきだと思うので、四羽は放し飼いの状態にして一日中飛び回らせておいた。おかげでそれぞれ素晴らしい飛翔能力を身に付けたが、やがて四悪は凶に乗って、夜になっても鳥カゴに帰らなくなった。逃げ回り、捕まえることが至難となってしまったのだ。



当時の居住区の様子

そこで風切り羽を切ることにする。まず逃亡癖のあるガツとクルの羽を一枚おきに切る。バランスをとって、他の二羽も同様に処置する。しかしその程度では態度を改めない。特にたちの悪いクルは、最も外側の羽を三、四本切って、格段に飛翔能力を落とした。これで、ヘリ

コプターのように天井を旋回して逃げ回るような芸当は出来なくなった。

マセなどはヘイスケの芸術的な飛行と違い、スピードを追求したものすごい飛び方をしていたので、よほど筋肉がついているらしく、羽が半減しても大して苦にならないようだった。それでも初めのうちは捕まっていたが、しばらくするとすっかり慣れたのが、また逃げ回って捕まらない。天井すれすれを飛び、高くて私の手の届かないところに行き。カゴの上に追いつめると、やはり手の届かない鳥カゴの背面を滑り下りる。何とも憎らしい。もうすぐ夏だった。何かの拍子に窓が開いたら困る。焦燥と怒りに震える飼い主は、断固たる処置をとった。

ヘイスケは、口笛を吹けば手の上に飛んでくるので、鳥カゴに入れるのは簡単だった。従って、彼は一度も羽を切られたことはない。クロも簡単に捕まるので、一度一枚置きに切られただけだった。それに対して、手のりでないフクは何度も飛べない鳥にしている。ほとんどの羽を切ってしまうのだ。

翼の羽（風切り羽）を切られても、鳥カゴの中での生活に支障はないが、ほとんど飛べなくなり、飛んでみても、ドテンと床に落ちることになる。ペンギン化するわけだ。もちろんブレイも一度飛べなくした。いい気になって帰らなかつたからだ。チビも人間不信で逃げ回った時、飛べない鳥となった。飛べないので人間を頼るようになり、不信感も消えた。

先に、処置されたクルを除いた三羽もその運命にあった。それぞれの不屈き度によって羽を切る。ハンはクル並みで済ませる。マセとガツが問題だ。この二羽は徹底的に逃げ回ったあげく、捕まると、

「ギヤー、ギヤー！」

と恐竜の子孫の鳴き声を発する。私は蛇ではない。失礼だ。ガツは半分以上マセはほとんど全部切ってしまう。これで二ワトリ以下の飛翔能力、完全なペンギンとなった。

ペンギン化したマセは、一時すっかり気落ちしてしまい。お箸でご飯を一粒ずつもらうのが好きだったが、食べなくなってしまう。おとなしくなってしまう。寂しい気もするが、いつまでも浮かれ騒いでもいられない。そのうち、目標をすばやく歩くことに決めたらしく、マセはチヨコ・チヨコ・チヨコと信じられない速さで歩き回り出した。あまりの速さに、つまずいている。どうしても普通ではいられない性格のようだ。

つづく